



民主主義ソーセージ

すぎもと よしお
杉本 良夫

●豪州ラトロップ大学名誉教授 社会学

国政選挙や州選挙の日には、あちこちでいい匂いがする。学校や公民館、教会などの公共施設に設けられた投票所の入り口付近で、有志がソーセージのパーベキューに精出しているからだ。食パンにくるまれた、あつあつのオーストラリア式ホットドッグである。投票をすませた人たちの何人かが、出来たてを買って、ほおぼっている。味付けのトマトソースのかけ具合も重要だ。ネット上では、どの投票所のソーセージがおいしいかという情報が飛び交ったりもする。ちょっとしたお祭り気分である。

オーストラリアでは、投票日は土曜日と決まっている。投票は権利であると共に義務なので、投票率はいつも90パーセントを割ることがない。18歳になって成人すると、投票権と投票義務が同時発生するわけだ。正当な理由なしに投票に行かないと、罰金を取られる。

罰金を伴う全員投票制は、1924年から始まって、ほぼ一世紀の歴史がある。世界でも珍しいシステムだが、すっかり定着している。罰金の額は昨年の国政選挙では20オーストラリア・ドル（約1,800円）。州選挙や自治体選挙では場所によって異なるが、1万円ほどのところもある。催促状が来ても無視し続けると、罰金額が何倍にもなる。

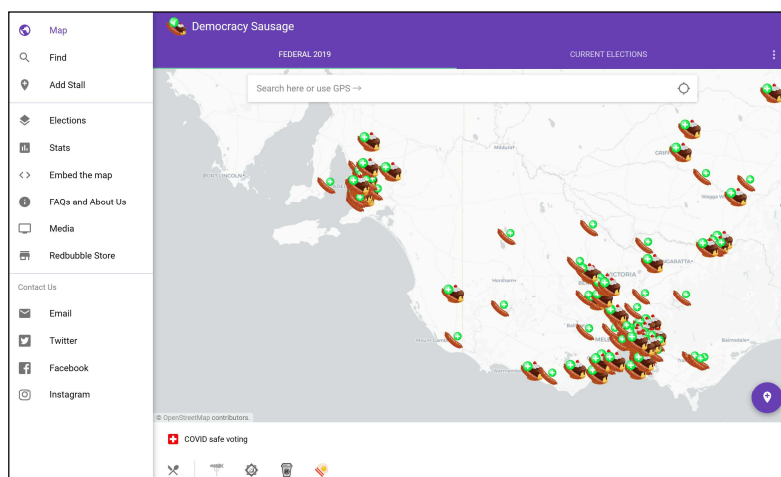
罰金を伴う全員投票制の導入当時、反対意見がなかった訳ではない。低収入や低学歴の人が棄権しがちだったので、この人たちが全員投票すると

なると、高収入者や高学歴者から支持を受けてきた保守派が損をするという議論があったからだ。しかし、ふたを開けてみると杞憂だったことが分かっただけではない。「投票者の過半数」ではなく、「有権者の過半数」が政権を握るというシステムこそ民主的だという考えが説得力を持ち、長く根付くこととなった。

もともと、投票所へ足を運ぶ義務はあるが、投票用紙に何を書き込もうが、本人の勝手だ。白票でも、落書きでもかまわない。とは言っても、実際には、自分の考えに近い候補者に投票する人がほとんどだ。

投票用紙には、立候補者全員の名前が羅列してあり、各候補者の名前の左側に四角い箱が印刷してある。その箱の中へ、当選して欲しい候補者順に番号を打っていく。例えば、5人が立候補していて、3行目の候補者に当選してもらいたいと思えば、その候補者の名前左の箱に「1」と書き込む。次が5行目の候補者なら、その左に「2」と記入し、絶対落選してもらいたい候補が1行目であれば、その名前の横に「5」と書く、といった具合である。全部の候補者に「1」から「5」まで番号を打たなければ、無効票となってしまう。優先順位連記方式というやり方だ。

投票所の入り口には各陣営が人を送って「投票の手引き」を、やって来た有権者に配っている。「こういうふうに優先順位を振り当ててくださ



投票所のソーセージを紹介するWebサイト

(引用元: "Democracy Sausage" <https://democracysausage.org/>)

い」というお願いの紙である。

夜になって、いよいよ開票となると、有権者の過半数が「1」を付けた候補者の当選が各選挙区で続々確定していく。ただ、問題はどの候補者も過半数に満たない選挙区だ。ここからこみ入った「優先順位の分配」という作業が行われる。計算式はややこしい。落選していく候補者に票を投じた選挙人の意向が「死に票」にならないような手続きが取られていて、候補者のうちのひとりが過半数になるまで、「分配」が続く。

こうした複雑な開票過程なので、当選者全員が決まるのには1週間以上かかることもある。何とか即日確定とはいかないものかと思ったりもするが、民主主義には時間がかかるということか。

オーストラリアは選挙先進国という面を持っている。今日では世界中どこでも、投票する人は自分の名前を書かない「無記名投票」がごく普通だが、こうしたやり方はオーストラリアが世界初だった。このため、この方式は英語では「オーストラリア式投票 (Australian ballot)」とも呼ばれる。1856年のタスマニア州の選挙で「秘密投票」が初めて採用され、これをもって嚆矢とするそうだ。

選挙運動のやり方も、日本とは違う。ラウド・スピーカーで、候補者の名前を連呼して「よろしくお願ひします」と車から大声で叫ぶ風景は見られない。拡声器でガンガンやったりするとひんし

ゆくを買って、落選確実だ。候補者はスーパー・マーケットや主要駅などの人の往来が激しいところに立って、静かに自分の政策を訴えるのが常道である。

オーストラリアでは、保守連合と労働党の2大政党の間で、何度も政権交代が行われている。目下、国政は労働党が与党だ。近年は緑の党も実力をつけてきた。

全員投票制と優先順位連記制の組み合わせは、政党間の競争を穏やかにして、ポピュリズムの台頭を防ぎ、中道政治を継続させがちになるという。各立候補者は、全有権者の意見に目配りしなければならないので、少数派の主張が国政や州政に汲み上げられやすい。新たに国籍を取った移民の人たちも政治への影響力を持つ道が開かれているため、極端な行動に走る確率が低いともいわれる。

さて、冒頭のバーベキューには、「民主主義ソーセージ (democracy sausage)」の名もある。この表現は2016年の「今年の言葉」に選ばれた。この年の総選挙では、当時のマルコム・ターンブル首相が投票所で、出来たてのソーセージにばくついて、こう話したという。「オーストラリアの民主主義は、ソーセージがジュージューと煮上がっていく香りなしには成り立たない」。けだし、名言である。